

時雨

貴高真白

第七章 「離別の意味」

「これは、これは、御美しいお嬢さんが二人も」

学生椅子に座り、余裕の足組をした来宮が三人を迎え入れた。

「創治」

櫻は来宮の後に立っている紅色の軍帽を被り、黒色の軍服に身を包んだ創治に釘付けになった。

「来宮肇―貴方の所業、些か度を越えていませんか？」

「そうだな、確かにやり過ぎかもしれない―しかし、それよりも奇児を創り出した研究所及び、幼稚な大人の方が些か度を越えてないかとは思わないか？」

「そうかもしれないですね、貴方の部下達は全員奇児のようですか？」

「ああ、出逢いの形は様々だったがほぼ全員そうだ」

「―貴方は、神になりたいのですか？」

「いや、人間は神にはなれない——決して」

言い終わると厳しい眼差しで二人は対峙した、後ろに控えている創治と櫻は寂しげな眼差しでお互いを見つめ合った。

「——大人は少し控えていた方がいいな、子供達の話し合いが残っている」

「櫻？」

「大丈夫です、彼の真意を聞きたい」

「君も少し、彼女と話をするといい」

「——はい」

「——何で、誘拐されたのに第二陸下軍を象徴する黒色の軍服を？」

「——来宮首領の、話を聞いて気づいたんだ」

「気づいた？ 何を？」

「——首領は奇児を助け援助し、腐った浮世現実を打破しようとしている」

「だから、何だ！ 創治の御父様を殺したのだぞ！」

「——何と言われ様と構わない、俺はもう決めた——陸軍独立派で、大人の俺を得る」

「——俺との約束は？」

「——」

「——一緒に、一緒に——大人に成って、元に戻すって」

「——棄却する、それに約束なんて所詮は——子供を綺麗に象徴する為の、道具に過ぎない」

その瞬間、無意識に櫻は鞘から刀を引き離した。そして、創治に向かって全力で駆け、刀を振り上げ振り落とした——いや、振り落とそうとした。

「——何で——」

創治の左肩に差し掛かる寸前で刀は止まった。が、創治は動じる事も止める事もせず黙って見下ろしていた。

「——どうして——道具なんて——酷過ぎる」

櫻は俯き、目から大粒の涙を溢れさせた。溢れ出た涙は教室の冷たい床に落ちて水溜りとなった。

「——な」

創治が何かを言った、櫻はゆっくりと顔を上げた。上げた瞬間、櫻の右肩に何とも言

えない激痛が全神経を駆け巡った―櫻はゆっくりと右肩を見つめた、右肩には刀が柄の部分まで深く刺さり見事に貫通していた。

「あー！ー！！！」

「櫻！！！」

百羽は駆け出そうとしたが来宮が目の前に現れた。

「！？」

「大人は黙って見ていよう」

言い終えたと同時に来宮の右掌が百羽の顔面を掴み、壁に叩きつけた。

「ぐっわ！！」

後頭部に鈍い痛みがじわじわと染みのように広がり、百羽は意識が軽く揺らいだ。

「―百―羽さーん」

「余所見をするな」

創治は苛立った表情で櫻の腹を蹴飛ばした、机や椅子に全身がぶつかり、転がりながら櫻は何とか止まった。蹴り上げたと同時に離され、刺された部分がぼつかりと空洞と

なり傷口に冷風が通り抜け神経が痺れを催してきた。

「弱いな、結局はそうやって誰かに護られなければお前は立つ事も出来ない」

「―何―で―創治」

「―黙れ」

創治は右足を軽く上げると、櫻の右肩を思いっきり踏みつけた。

「いやー！ー！！ああー！ー！！！」

鮮血が溢れ、飛散し創治が身に纏っている軍服までも染めても尚創治は踏み続けた。

「実に美しい光景だな」

「止めろ！！今直ぐ！！これ以上二人を傷付け合せるな！！！」

「―何も知らない」

「―？」

「何も知らない駒は舞台上が上がってはいけないのだよ」

そう言うとき来宮は再び百羽の後頭部を思いっきり壁に叩きつけた、何かの拍子に切ったのか壁から血が滴り落ちた。

「創治」

百羽を離し、白色のハンカチで鮮血を拭き取り刀を鞘から引き抜き創治に差し出した。

「はい」

忘却の自分が、泣いている

「彼女を神に送り返しなさい」

軟弱、薄弱、どれも弱を背負って

「」

「君なら出来るだろう？」

それなのに、認識を探索し

「一分かりました」

創治は一息零して覚悟を決めると刀を振り上げ、櫻の右胸目掛けて振り落とした。

「百条の理、二十三条」

突然、創治が振り下ろした刀が弾け飛び教室の壁に突き刺さった。この空間で初めて声を発した人物に創治も来宮ですらも驚愕した。

「久しぶりだな、人間の姿に変化するの」

声を発したのは獣鳥から人間の姿に変わった菖倭だった。

「貴様」

「来宮肇、久しい名だな」

「何がだ？―それに、貴様の様な者に逢った憶えはないが？」

冷静な対応を取っている来宮だが、菖倭には明らかに動揺していると感じ微笑を零した。

「貴様はまだ坊の年頃だったからな―そう、極天島で」

。その言葉を聞いた瞬間、来宮から言い様の無い怒りの気が発せられた。隣で時下を感じた創治は立っている事が不可能となり其の場に膝をついた。

「怒りの気を上げて、儂には通用しない―其れよりも貴様の大事な犬が壊れてしまうぞ」

菖倭に諭された来宮は一息零すと怒りの気を静めた、そして何時の間にか気を失ってしまった創治を横抱きにして抱え上げた。

「今回は我等の勝利だ」

来宮は教室の扉を開け、振り向きざま菖倭に物凄い剣幕で言った。

「構わない」

そして、来宮は去って行った。

「やはり、あの島の名を言っただけで動揺すると言うことは未だ」

櫻の傷と百羽の傷を癒しながら、菖倭は青く冷え切った夜空に光を与える満月を見上げた。

「……、君が儂の元から去ったのも——こんな、満月の冷たい曝け出しの日だったな」

痛いよと泣き叫んでも、犬は何も答えずに猫が絆創膏を差し出してくれるだけ——何と、滑稽な

「好きだ」——其の言葉が何度もリフレインする——あれは嘘？ 其れとも真？ 創治——俺はこれから何を信じればいい？ 何を受け止めたらお前は真っ直ぐ、あの時と同じ様に

俺を見つめてくれるのだ——

秋にしては珍しい暖かな朝日が閉じていた臉に差し掛かった、櫻はゆっくりと臉を持ち上げた。

「あ！櫻ちゃん」

お葉都が嬉しげな声を上げて櫻の顔を覗き込んだ。

「——お葉都ちゃん」

長時間声を発していなかったのか櫻の声は掠れていた。

「右肩は菖倭さんって人が治療してくれたからもう大丈夫だよ」

お葉都は額に大きな絆創膏を張っているながらも元氣そうだったので櫻は安心した。

「——他の皆は？」

「皆、大した怪我は無いよ——でも次からはこうは済まないかも」

櫻は初めてお葉都の寂しげな表情を垣間見た。

「取り合えず、翳夜様に連絡してくる！」

お葉都は直ぐに何時もの笑顔に戻ると部屋を飛び出して行った、残った櫻は木目が整

つた天井を見上げた。

「―本当に敵になつたんだな、俺達」

引き千切って、破り捨てて、叩き付けければ―何処からか、訂正が許されるのでしょうか？

右腕を折った塑依は縁側に座り、地面をじつと見つめていた。

「―空已、強くなっていたね」

「お前も強くなった、充分だ」

「―強くなっていないよ、貴方が傍に居るからだよ」

「そうか」

「―しばらく一人にして」

塑依は膝を抱え、顔を埋めた。

「俺は―もうお前しか愛せない―だから、泣くな」

久方ぶりの休息も心の瘡蓋を抉るだけの一興に過ぎない―もう、舞台には君と僕しか

「助けて頂きありがとうございます」

翳夜はゆつくりと頭を下げた。

「構わない、ああしなければ確実に櫻は死んでいたからな」

菖倭は杯に注いだ酒を咽に流し込んだ。

「しかし―幾ら変化とは言え、其処まで完璧に変化出来るとは」

「儂も何百年振りだからな、何時まで保てるかは」

「左様ですか」

「しかし、極天島での出来事はもう過去の残像として扱われていたと思っていたのに」

「御存知なのですか？」

「深き処までは儂も流石に掴めてはないが」

「―極天島、久しい名ですね」

「泉鳳家もあの場におったからな」

「―皆、散って逝きましたね」

「何時か、花を―手向けに行きたいな」

菖倭は寂しげな笑顔で酒を咽に流し込んだ。

手向け花に口付けて、微笑んだまま青空を見つめたまま死んだ君に色は映るでしょうか？

創治は用意された私室のベランダから遠い山の頂、街並み、そして近未来的なビル群―アンバランスでありながら何処か均等的で美しい風景をぼんやりと見つめていた。

「―櫻、無事だったかな」

「無事だよ、何せあの告神が人間に変化してまで助けたのだから」

振り返ると何時の間にか外された錠前を右手に持った瀧が立っていた。

「―貴方は？」

「第二蓮総隊長、瀧―君がこれから政治面で何かをする際に茶々を入れるから宜しく」

何処となく柔らかい雰囲気が漂うのに何処か得体の知れない独特の空気を持つ雰囲気、創治は身を強張らせた。

「緊張しているね―此処はまあ、差し詰め大奥みたいな場所だからな」

「大―奥？」

「あれ？ 歴史とかで習ってないかい？」

「いえ、過去の歴史などに関する授業は二十年前に廃止になり、今は経済と経営学がメインです」

「―教学総領は何を考えているのだから」

瀧は遠くを見つめながら、溜息を零した。

「あの、大奥って？」

「ああ、遙か昔の殿方が支族繁栄と己の性欲を満たすだけにあらゆる場所から女を捕まえ、侍らせていたのだ」

「女性には、いい気持ちはしませんね」

「まあ、多種多様だったのは確かかな？女の地位確定や復讐や最高級品に囲まれて女の華を咲かせて優雅に散る事を誇りとする——」

瀧は、創治の隣まで足を運ぶとベランダから外の景色を眺めた。

「君は、その大奥に閉じ込められた小さな小鳥みたいだね」

突然、歴史の話から現実の話へと引き戻され創治は返す言葉が見つからなかった。

「俺は、そんなに弱く見えませんか？」

「ああ、君は明らかに軟弱だ——子供という事もあるからかな」

「——」

先刻の優しいな空気から一変し、冷気の空気へと変貌し創治の額と背中から冷や汗が溢れ出した。

「君が幾等、化け狐の皮を被ってもその軟弱は隠し通す事は不可能だ」

「——」

「ま、精々——頑張って」

絶対零度の微笑で、瀧は創治の肩を軽く叩くと部屋を出て行った。

「——つくしょう」

創治は其の場に座り込み、何度目になるか分からない嗚咽交じりの涙が溢れ出た。

「…遠？」

上則は左肩から左腕まで白色の包帯を巻き、窓から遠くを見つめている遠の名を呼んだ。

「あ、則ちゃん！大丈夫だった？」

「…うん、折れていたから直ぐに治る」

「そっか、良かった」

遠が安心した笑顔を零したので上則も安心した笑顔を零した。

「私——また瀧さんと距離が遠くなっちゃう」

上則が安心したのも束の間、聞きたくない名を聞き上則の心に荒波が立った。

「…遠くなったら悲しい？」

「うん―則ちゃんも、遠くなったら悲しい」

「…そう」

「遠、無事で良かった」

其の時、タイミング良くか其れとも図ったかの様に瀧が遠の名を呼んだ。

「瀧さん！」

遠は満面の笑顔となると瀧の元へ駆け寄った、上則は其の光景に目を奪われたまま動けなかったが何とか体に鞭を打って遠と瀧に背を向けて歩き始めた。

「則ちゃん！瀧さんが一緒に昼食どうかって？」

「…いい、腹減ってない」

苛立った口調で言ったので遠は傷ついただろうと上則は思ったが、そんなに余裕ある人間ではないので構ってはいられず、足早にその場から立ち去った。

恋心が愛おし人にだけ、永久に伝わらないのは青空が華やぐ為の糧だからでしょうか？

額に汗を滲ませながら羅央はゆっくりと起き上がった、隣には全裸で眠る羅柚が眠っていた。羅央は顔を近づけて羅柚の髪を撫でると情事の残り香が空気の流れに乗って羅央の鼻腔に流れ込んだ、羅央は溜息を零し立ち上がると軍服を簡単に着込んで部屋を出て行った。

「―怪我は無かったのね、無事で何よりだわ」

長い廊下を当てもなく歩いていると前方から吾子が向かって歩いてきた。

「いや、足やられた」

「折ったの？」

「いや、切られただけだ」

「―又、羅柚ちゃんを抱いたの？」

其の瞬間、二人の間を漂う空気が一変した。

「お前には、関係がない」

「あるわ、彼女は私に全信頼を置いてくれているのよ」

「それとこれは関係ない——あいつを護ってくれるのは感謝する」

「待って!!」

過去は何の為に光り輝いている？

「貴方はそれで何時まで、彼女を鳥籠に閉じ込める気なの？」

「嘘はどうやって、癒せば閉じれる？」

「——」

安息の溜息は何時、零せる？

「彼女は未だ十八歳よ、其れなのに殺しや意味の無い性交渉を教え込んで——貴方は其れで、きや!!」

吾子は急に羅央に腕を掴まれて、壁に押し付けられた。

「——だったら、俺は何に頼ればいいんだよ!!」

顔と顔が間近に迫り、吾子は目のやり場に困ったが羅央の切ない言い分に心が揺らいだ。

「——私を頼って、って——言ったじゃない」

声楽の音色を癒しに

「其れだけは——出来ない」

其の癒しが罰だと知っても

「どう——して？」

起爆剤を抱えて、偽りの眠りを

「思い——出す——か——ら」

その言葉を聞いて、吾子は引き下がる選択しか自分には残っていない事を知った。

「わりの、痛かっただろ？」

羅央は吾子の手を離しながら謝罪の言葉を発した。

「——いいえ」

赤くなつた手を隠す為に手を擦りながら吾子は首を横に振った。

「罰を受けるのは俺だけだ、お前でもなく、羅柚でもなく」

そう言って、羅央は吾子に背を向けると其の場を立ち去った。彼を振り向かせる言葉が見つからない吾子は黙って其の背中を見つめるしか方法がなかった、そして隅の壁際

ではシャツ一枚を羽織っただけの羅袖が座って膝頭に顔をくっ付けて涙を堪えていた。貴方が差し出してくれる手もぎ取った他人の手だと気づかず、偽りのワルツを？

菖倭は核政院の廊下に敷き詰められた赤絨毯を歩いてきた。創汰の逝去により慌て混乱していた為、誰も菖倭に声を掛ける人物は居なかった、そして辿り着いたのは中央の最奥にある中央資料室と書かれた場所の扉を開け、一つの書棚の前に立ち止まった。

「翳夜の指示によるとこれを前に――押すと――」

菖倭は書棚の前に押した、すると床が横開きになり地下へ通じる階段が現れた。

「成程――汚い大人は狡賢いな」

地下へ下って行き、再び固く閉ざされた木扉の前に立つと一息を零して扉を開いた。中には、小さな庭園と家屋が誰にも知られる事なく存在していた。

「地下なのに光が――百条の理、八条か」

菖倭は苛立った気持ちを押し隠しながら家屋へと歩みを進めた、扉を叩くと中から女

性が現れた。

「――菖倭殿」

「久しいな、生透尼」

・夢師　　・は突然の来訪者に目を見開き、涙を溢れさせた。

見知らぬ時空で見知った空間で君に再会出来ても、僕は愛を受け入れられるでしょうか？

「来訪、誠にありがとうございます――菖倭」

檻に囚われた・夢師・は深く頭を下げながら言った。

「頭を下げるな、儂とそなたは――」

「変わらぬ御姿で、王層は嬉しいです」

「いや――もう、そなたに逢えないと思っていたのに」

「――私の心を動かすのは――御止め下さい」

「すまない」

「いえ—それより、貴方が此処へ御越しになったのは？」

「未来が運命通りに、徐々にだが動き始めたので」

「—左様ですか」

「知っているのだろうか、そなたは全てを」

「はい」

王蜃の真っ直ぐな眼差しに菖倭は嘘、偽りは無いと確信した。

「そうか、いや—もし変えられることが出来るならば、と浅墓な期待を抱いていたのだが」

「未来絶対不変、未来絶対到来—先人の教えは、忠実に受け継がれています」

「そなたは、官僚に未来を？」

「—何とか持ち堪えています、もう私と生透尼しか護れる人物はいないので」

青痣—護れるのならば、痛みでなく証として受け入れよう

「泣かないで下さい、仕方ないのです—我々は負けたのですから」

涙—離れないのならば、枯れるまで零して差し出そう

「だが、そうだとでもこれはあまりにも酷過ぎる」

引き換え—数少ないけど代価の役目を果てさせるのであれば

「—菖倭殿」

こんなに言葉を並べても、何も掴めないなんて—

「其れに、愛する者がこの様な仕打ちを受けているのに—」

—何が善？

「そなたと一緒に明日を見て、未来を感じてそして、幸せに暮らしたいと願っていた」

何が悪？—

「でも、未来は決まっていたのです」

—何が誤答？

「そなたは其れでもいいのか！？」

何が解明？—

「その様に簡単に頷いて、そなたはあの楽しかった時を忘れられるとも言うの